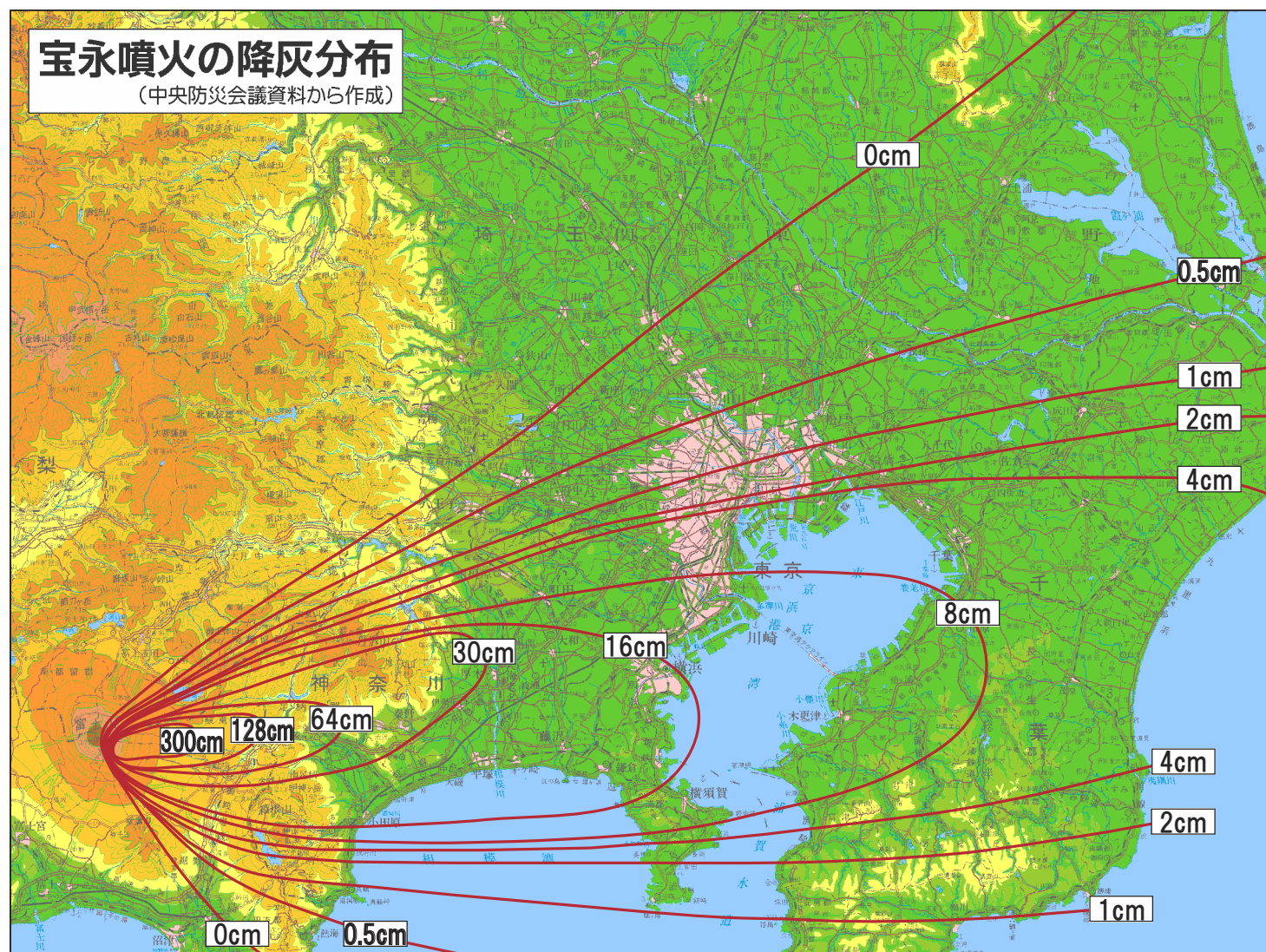
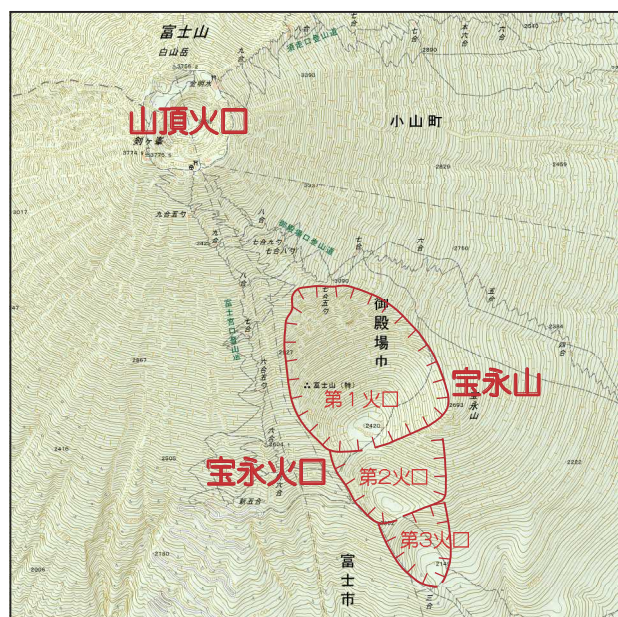


1707 年富士山宝永噴火

富士山は、今からおよそ 300 年前の 1707 年（宝永 4 年）旧暦 11 月 23 日（現在の 12 月 16 日）、南東斜面から爆発的な大噴火をおこしました。この噴火を「富士山宝永噴火」といい、噴火により新たに開いた火口は「宝永火口」と呼ばれています。

噴火は 16 日間続き、上空高く舞い上げられた火山礫や火山灰は、冬季の季節風に乗って、江戸をはじめ南関東一円に降り注ぎました。東南麓にあたる現在の御殿場市周辺では、家屋が厚く堆積した火砕物の重みで潰れたり、「焼け石」が屋根に落ちて発火し火事がおきています。一方、このような大規模な噴火であったにもかかわらず、直接的な人的被害は少なかったとみられています。これは、富士山の裾野が広大で、さらに宝永火口が集落から離れているために火砕流や溶岩流に直接襲われるということがなく、また、富士講登山者のいない冬場であったことも幸いしていると考えられています。



■長期化した二次災害

宝永噴火では、噴出物が大量であったため、火山灰をかぶった農作物に被害が生じたばかりでなく、降下火砕物が厚く堆積した農地は使うことができず、たちまち飢饉に直面しました。森林も荒廃して土石流等を誘発し、酒匂川流域の足柄平野では、降雨のたびに多量の土砂が流れ込み河床上昇や河道閉塞による洪水氾濫が繰り返し発生しました。そのため洪水に巻き込まれた犠牲者や餓死者も出ています。このように宝永噴火では土砂災害等の二次災害で、長期間にわたって人々が苦しめられることになりました。

■宝永噴火と宝永東海地震

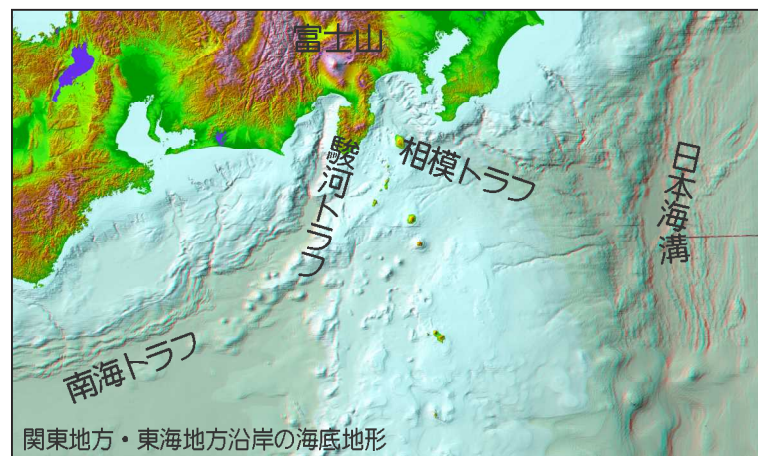
富士山で宝永噴火が発生する 49 日前の、1707 年（宝永 4 年）旧暦 10 月 4 日（現在の 10 月 28 日）、紀伊半島沖を震源とするマグニチュード 8.6 の「宝永東海地震」が発生したことから、巨大地震と富士山の噴火の関連はしばしば注目されています。「島弧型火山」でプレート境界に位置する富士山と、プレート境界を震源域とする地震が互いに連動し合うメカニズムでは、マグマだまりの位置や蓄積状況、震源の位置などの関係で、連動して地震や噴火が実際に起きてしまう場合や、逆に、噴火活動などが沈静化する場合があり、大地震が起きた後に噴火が起こる・起こらないという単純な関係は成り立ちにくいといえます。

火山性地震や火山性微動の十分な観測を行ったうえで発表される正しい火山情報にもとづいて冷静に対応することが必要です。

富士山

3776m

富士山^{ふじさん}は、東京の西南約 100km、山梨県と静岡県にまたがる成層火山^{せいそう かざん}で、その高さにおいても大きさにおいても日本一の山です。豊富な地下水が得られる広大な裾野は早くから人々の生活の場となり、農耕が営まれ、集落も形成されてきました。古来から、秀麗な姿を仰ぎ見ながら関東と関西を行きかう多くの人々を魅了してきた富士山とその一帯は、いま日本有数の観光地となり、日本人の信仰の象徴として世界文化遺産にも登録されています。



関東から東海地方沿岸の海底地形を見ると、南海トラフから延びる駿河トラフと、日本海溝から派生した相模トラフとの扇のかなめの位置に富士山があるように見えます。ここは、フィリピン海プレート、北米プレート、ユーラシアプレートの境界が接する場所です。そのために、長期間、大量のマグマが供給され続けており、そこに富士山が形成されたともいわれています。

現在の富士山は、小御岳火山や愛鷹火山の一部を覆っていた古富士火山^{こふじ}ができ、さらに古富士火山を覆うように新富士火山^{しんふじ}が成長してできたと考えられています。近年、小御岳火山の下位に先小御岳火山^{せんこみだけ}が存在していることが、ボーリング調査の結果明らかになりました。

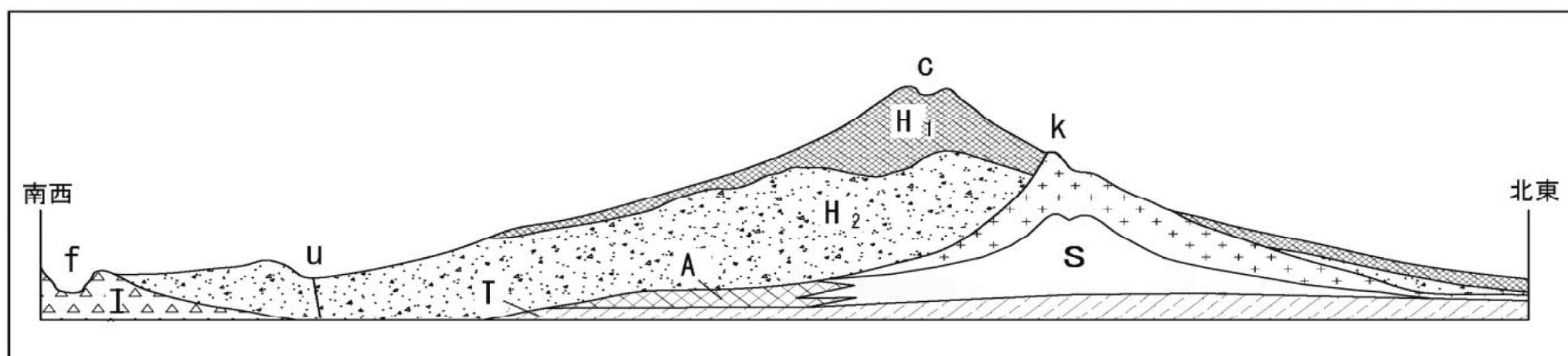
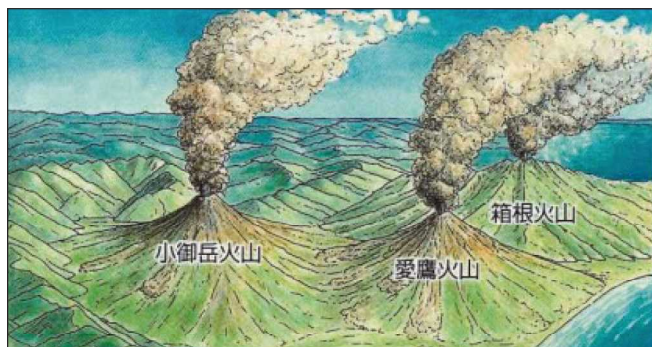


図1 富士山の模式的な断面図（「津屋,1940」を「中田ほか,2007」を参考にして一部修正）

c 富士山頂、H₁ 新富士火山、H₂ 古富士火山、k 小御岳及び小御岳火山、S 先小御岳火山
A 愛鷹火山の一部、I 第四紀層、T 新第三紀層、f 富士川、u 潤井川

■小御岳火山の時代



今から約 70 ～ 20 万年前に、現在の富士山山頂の北側に小御岳火山と呼ばれる火山が誕生しました。

■古富士火山の時代



約 10 万年前になると、小御岳火山の中腹で古富士火山が噴火を開始しました。古富士火山は爆発的な噴火を繰り返し、少なくとも5回の山体崩壊を発生させました。

■新富士火山の時代



約 1 万年前になると、古富士火山を覆うようにして新富士火山が噴火を開始しました。約 1 万年前～8 千年前ころには、三島市や大月市付近などに到達するような大量の溶岩を流出させました。

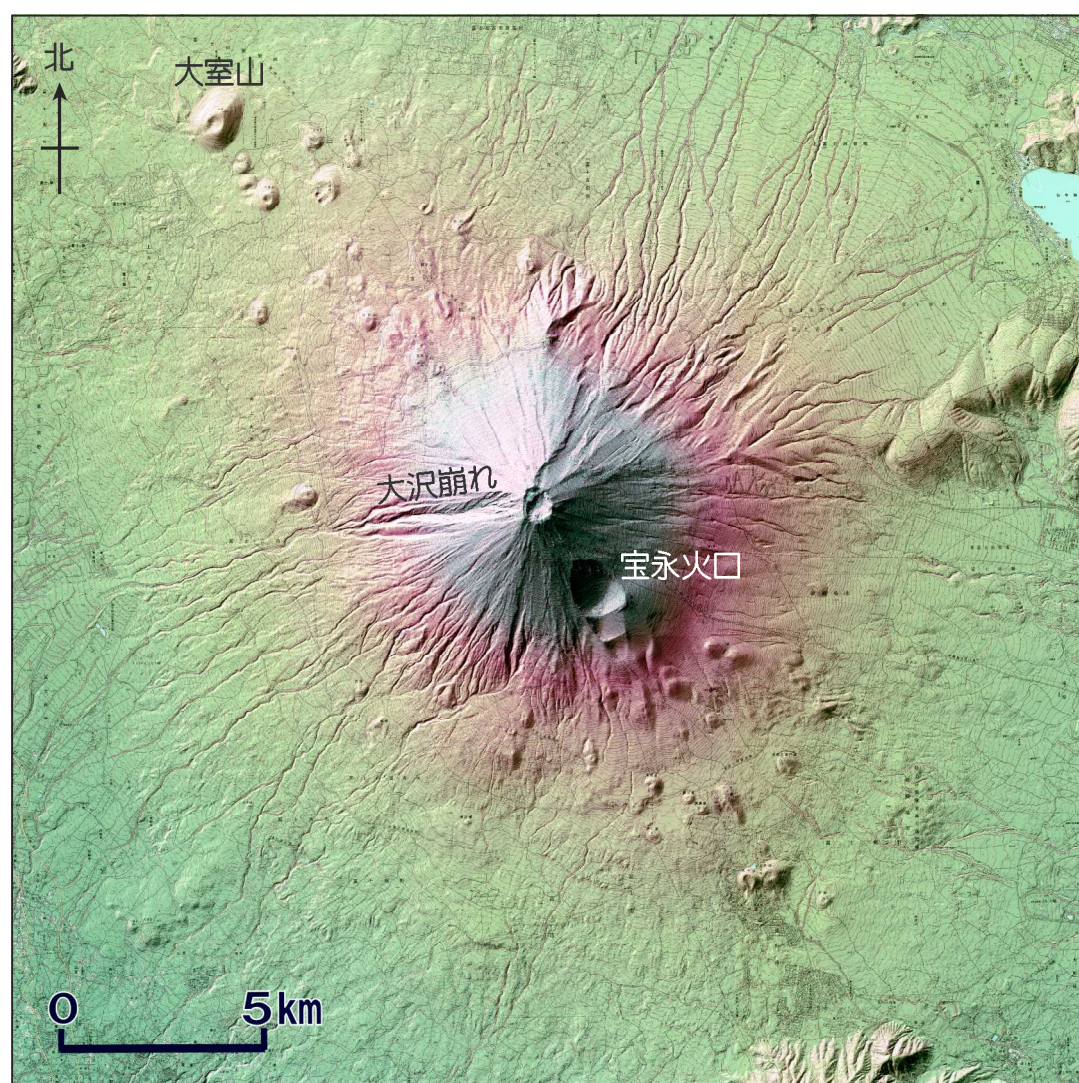
図一2 富士山のおいたち（富士砂防工事事務所，2001）

■富士山の火山活動の痕跡

富士山は有史以降にもたびたび大規模な噴火をおこしています。右の地図を見ると、富士山の山頂を中心に、北北西から南南東にかけて、側火山と呼ばれる山腹斜面にできた小さな火山がいくつも存在していることがわかります。その多くは数m～100m程度の高低差のスコリア丘ですが、図の左上の大室山のように高低差が300m近い大きなものもあります。

山頂の右下、南東の山腹に大きく口を開けているのが宝永火口で、山頂火口よりもはるかに大きいことが見てとれます。

山頂付近から西に延びる大きな亀裂は「大沢崩れ」と呼ばれる巨大な崩壊地です。



■貞観噴火

平安時代の864年（貞観6年）の大噴火を「貞観噴火」といいます。宝永噴火が、粉碎された噴出物が噴煙とともに上空高く舞い上がる爆発的な噴火であったのに対して、貞観噴火は主として溶岩流が比較的穏やかに流れ広がる噴火でした。北西山腹の長尾山付近の2つの割れ目火口から約2ヶ月にわたって噴出されたマグマの量は宝永噴火の約2倍と推定されています。後に「青木ヶ原溶岩」と名付けられたこの溶岩流は、本栖湖と当時存在していた「割の海」といわれる大きな湖に流入し、「割の海」は二つに分断され「西湖」と「精進湖」が誕生しました。溶岩流の上には大森林「青木ヶ原樹海」が広がっています。



富士山は生きている火山

富士山は宝永噴火後、静穏な状況ですが、活火山であることに変わりません。

宝永噴火から300年の間に富士山麓の開発は進み、偏西風に乗って大量の火山灰が運ばれた東側には東京を中心とした首都圏があるだけに、噴火の影響は測り知れません。宝永噴火のような爆発的な噴火もあれば、貞観噴火のように溶岩の流出が主体のものもあります。さまざまな局面を想定した火山防災の準備が必要です。